



柿沼 作生^{さき} さん

● 閑馬小学校 6 年

安心して暮らせる家造り

ぼくの将来の夢は、建築士になることです。

ぼくが5才の時に、東日本大震災がありました。その時、ぼくと妹は幼稚園にいて、家には、お母さんと生まれたばかりの弟が二人きりでした。お母さんたちの顔を見るまで、電話も通じなくて、家がこわれて、下敷きになっているのではないかと心配でした。

この経験から、ぼくは、地震が起きてもこわれない、みんなが安心して暮らせる家を造りたいと考えています。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からの メッセージ



朝晩の冷え込みも増し、日に日に秋の深まりを感じるこの頃、皆さんいかがお過ごしでしょうか。

先月は市内各地でさまざまな秋の催しが開催されました。各会場で皆さんの笑顔に接し、たくさんの方の元気をいただくことができました。また、先月16日から、本市を会場として全日本古希野球大会が開催されました。北は北海道、南は大分県まで64チーム、千人を超える選手・関係者が佐野市に集まりました。本市の魅力に触れていただき、スポーツ立市を掲げる本市として、まさしくスポーツツーリズムのお手本となる大会となりました。開催運営に携わった関係者の皆様に深くお礼を申し上げます。

さて、6月22日から行ってきた第2次総合計画策定に向けた地区別懇談会も先月7日をもちまして、全て終了することができました。この地区別懇談会でお聞きしたさまざまなご意見、ご提案を参考とし、平成29年中の策定に向け検討を進めてまいります。お忙しい中、出席くださった皆さんには心から感謝申し上げます。

本市の紅葉の便りが北部の中山間地域から聞こえて来ております。本市には紅葉の絶景ポイントが数々ありますが、国指定史跡の唐沢山城跡も美しい紅葉を見ることが出来る名所です。

来年秋には、唐沢山城跡を会場とし「全国山城サミット」が開催されます。関東の七名城といわれる唐沢山城跡に全国から大勢の山城ファンが集まることと期待しております。今後一年をかけ、唐沢山城跡の見どころを全国に発信してまいります。まずは、市民の皆さんに唐沢山城跡の魅力を知っていただくことが大切です。ぜひ、紅葉の唐沢山城跡に足を運んでみてください。

岡部正英



今回の表紙 「国指定史跡唐沢山城跡」 ※写真は平成26年11月中頃撮影

平成29年度に「全国山城サミット」が佐野市で開催されることが決定しました。

「山城サミット」は全国の城郭や城下町を有する自治体が情報交換等を通して親睦と交流を深め、山城を活かした地域の活性化を図るために開催されており、平成28年10月現在、全国で93団体143城が加盟しています。

やながわ えつこ
柳川 悦子 さん
(赤坂町)



〇プロフィール

発達障がい親の会「こだわりっこの会」
主催。本人支援「おもちゃ図書館」主催
ADHD支援「NPO法人 えじそんくら
ぶ 両毛の会」代表
地域総合小児医療認定医

合言葉は「子育てするなら 佐野市だね！」

柳川悦子さんは、赤坂町でご夫婦で小児科医院を開業、自身は発達障がいと心の専門外来を行い、特性があっても社会に適応し、カラフルに輝ける支援をしています。

発達障がいの家族交流の場「こだわりっこの会」を毎月開催、「おもちゃ図書館」ではチョコレート作りなどのイベントを行い、毎回100人ほどの親子が参加し大賑わいです。



また、学校や幼稚園・保育園などへの支援児巡回訪問指導のほか、市・県の委員を務められており、講演会を年30回ほどこなされます。その活動が評価され、平成26年には「母子保健奨励賞」を皇太子殿下より授与されました。

スケジュールが驚くほど毎日ぎっしりで、家事などはどうされているのか尋ねると「ご飯作りは得意です！どんな時も食事の用意は欠かしたことはありませんよ」と話します。

佐野市では、年約900人の赤ちゃんが生まれ、その約1割に何らかの特性が

認められます。

柳川さんは4男1女の母で、長男は自閉症、次男はADHD（注意欠陥多動性障害）傾向の子育て経験を振り返り「発達障がいについて、大学で学んだが、現実には机上の空論でした。自分の子どもに発達障がいがあると気づいた時、自分ではなかなか認められず、夫が自閉症と診断しました」と話され、とても率直に、障がい児の母としての苦悩や希望を語ってくれました。だからこそ、特性のある子を持つ親の気持ちに痛いほどよく分かり、一生懸命になれるのですね。

ご夫妻とも佐野生まれの佐野育ちを利点とし「あの薬局の娘だと知っているから安心して相談してくれる。生まれた時から関わってきた子どもたちの成長を、20歳になっても見続けられることは地域の醍醐味」「この佐野で、子どもたちに笑顔で暮らして欲しい、その思いが私の原動力です！」と笑顔で話されます。

またひとり、力強い『佐野サポーターズ』を見つけました！皆さんで力を合わせ、地域に根差したネットワークの構築を進めていきましよう。

(市民記者 永倉 文子)



実をたくさんつける柿を ミシラズという

柿には甘いものと渋いものがあります。甘柿は秋も深まって赤みが増してくると、渋味がなくなっておいしく食べられます。この種の柿には、平たい形をした富有柿（ふゆうがき）次郎柿などがあります。

一方、赤みが増しても渋味が抜けない柿があります。方言ではこれらの柿をミシラズといいます。「身不知」という漢字が当てであるように、身のほどを知らない柿、つまり、果実の重さで曲がったり折れたりするとは知らずに、枝という枝にいっぱい実をつける柿ということです。この種の柿には平核無（ひらたねなし）蜂屋柿も渋柿の一種です。

「ウチノヘーリックチ（我が家の玄関）ンとこにあるミシラズに、実がエレー（たくさん）なったもんだから、枝がオツカケネーダンベ（折れないだろう）かって、隣ンチでシンペー（心配）してるんだってガネ」

渋柿はシモシラズともいいます。「霜不知」と書くように、秋が過ぎて霜が降りる季節になっても、赤い実をつけたまま枝にぶら下がっています。でも本格的な冬の寒さが訪れるようになると、熟（じゅく）して甘くなります。山に自生する山柿は柿の原種といわれるだけに、とてつもなく渋く、小さいのが特徴です。どんなに渋い柿でも寒さが増すとともに熟し甘くなります。

「なんぼシビー（渋い）山柿やシモシラズだって、寒くナツチャー、ヤーラケーズクシ（やわらかい熟柿）ンなって、いずれば甘柿ンナツチャンだよ」（市民記者 森下喜二）

